

常設展示学習Bシート

2025. 12 改訂

解説プラス



この学習シートは、各時代の説明があり、問題がのっています。

解説を読んで概要^{がいよう}を知り、展示をよく見たり、聞いたり、考えたりしながら書きこんでいこう。

そして、昔の人びとのくらしぶりや時代、生き方を想像してみよう！

学校

年

組

名前

原始「ナウマンゾウ」と「縄文のムラ」



ナウマンゾウ

ナウマンゾウと黒曜石を見てみよう！

野尻湖岸の立が鼻遺跡(信濃町)の約4万年前の地層から、ナウマンゾウやオオツノシカなどの骨(化石)が見つっています。ナウマンゾウの骨は、数頭分がバラバラになって出土したことから、野尻湖周辺にいた旧石器人たちが解体したとする説があります。

ナウマンゾウは、約30万年前から2万年前に日本に生息していました。最大級のオスで全長3.7m、幅1.4m、高さ2.7m、体重は約4トンです。しかし、地球の

寒冷化と、人類の狩猟によって捕り尽くされて絶滅したという説があります。2万年あまり前、日本列島は氷河期の中でも最も寒い時期であり、人びとは食料となる動物を求めて移動生活を送っていました。野尻湖周辺には、この時期の遺跡が多く、黒曜石で作ったナイフのような石器がたくさん見つっています。



縄文のムラ

約6,000年前の縄文のムラを探検しよう！

ここでは、今から約6,000年前の縄文時代前期、八ヶ岳の麓にあったムラのように再現しています。森を切り開いて、竪穴住居や広場などのある風景が広がっています。人びとは、地面を掘って床をつくり、穴を掘って柱を建て、屋根をカヤなどの植物で葺いた竪穴住居で暮らしていました。展示室の竪穴住居は、諏訪郡原村阿久遺跡(国指定史跡)の発掘調査をもとに復元したもので、柱にはクリ、ミズナラなどが使われています。

この家の家族は父親と母親、小さい子ども2人の4人です。お父さんと息子は犬をつれてシカ猟に出かけ、お母さんと娘は近くの小川に洗い物と水汲みに出かけているので、今この家は留守なのです。さあ、探検に出かけましょう。



竪穴住居の中

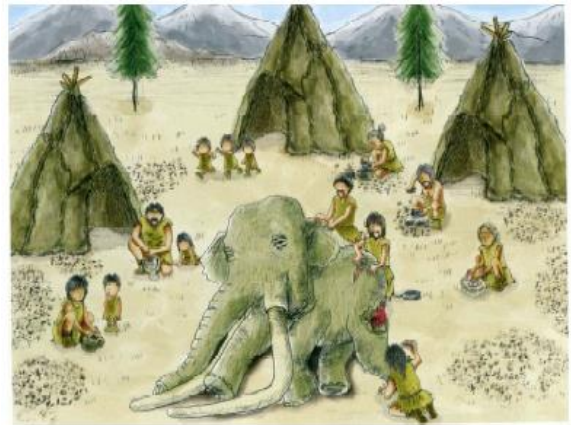
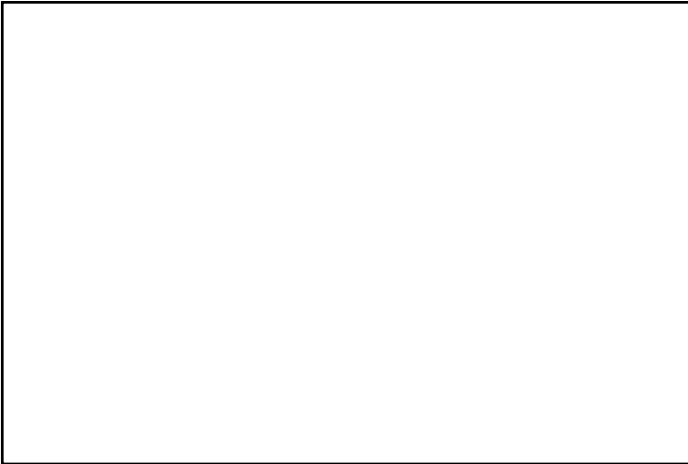
君も竪穴住居の中に入ってみよう！

約6,000年前、縄文時代前期の東日本では、ドングリやヤマグリなどの木の実やキノコ、ヤマノイモなど植物を採ってきて食料にしたり、秋にはサケ漁、冬には鳥や獣の狩猟などをしたりして暮らしていました。

この竪穴住居の中には、クマ、ニホンシカ、カモシカの毛皮が敷かれています。炉の中には火にかけた土器の中でヤマグリがゆでられています。夕食の準備をしているのでしょう。炉の脇の浅い鉢にはドングリ団子

にイノシシの肉などの煮物が盛られています。炉の周りには、ドングリなどを割る台石とたたき石、それらを粉にする石皿とすり石などがあります。炉の上の火棚には川魚の燻製やヘビの干物もあります。さまざまな食事や道具から、縄文人の豊かな生活を実感できます。

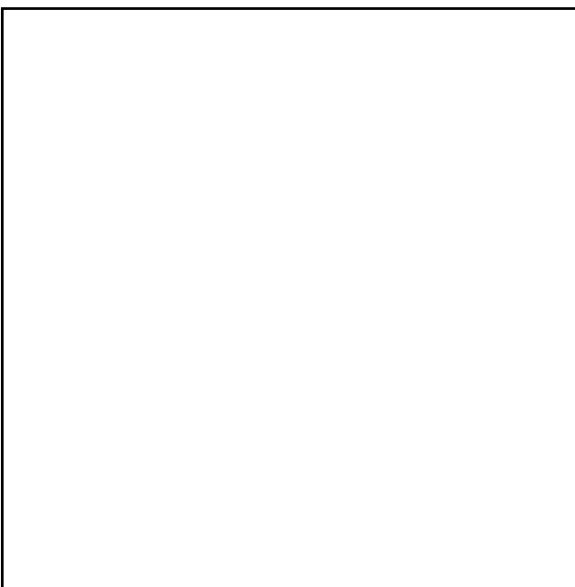
◇4万年前の人びとは、どうやってナウマンゾウをつかまえたんだろう？



◇君は、6,000 年前の縄文のムラにタイムスリップした。このムラをよく観察して、今夜の夕飯の材料になりそうな動物や植物をさがせ！



◇米づくりには、さまざまな農具が使われた。展示物の中から米づくりに使われた道具を探してみよう。



◇1,500 年前の古墳時代。シナノに朝鮮半島の人びとが渡ってきた。シナノと朝鮮半島で似ているものを探してメモしよう。



中世「鎌倉時代の善光寺門前」

善光寺の阿弥陀如来

ここでは、今から 700 年以上前の鎌倉時代の善光寺のようす（門前）を再現しています。善光寺は、信濃国だけではなく、全国からたくさんの人たちが集まる「三国一の霊場」といわれていました。

善光寺のご本尊は「阿弥陀如来」といいます。阿弥陀如来は、亡くなった人びとを極楽へ呼んでくださいます。善光寺の仏さまこそ、日本に最初にやってきた阿弥陀如来と信じられていました。この仏さまは決してだれも見ることのできない秘仏なのですが、ご本尊をまねて造られた一光三尊という形式の「前立本尊」でその姿をしのぶ（想像する）ことができます。この時代は全国各地で善光寺仏が造られ、善光寺ブームになりました。現在、前立本尊を拝むことができるのは、数え年で7年に一度（丑年と末年）の「御開帳」のときだけです。

鎌倉時代は低温の年が続き、たびたび飢饉が起きました。飢饉になると人びとは少ない食料を求め、争いも多くなります。病気もはやります。そのような中、今生きている世界（現世）に希望が持てなくなった人びとは阿弥陀如来にすがり、何を祈ったのでしょうか。



復原した善光寺門前



『一遍聖絵』の善光寺門前

善光寺門前のにぎわい

鎌倉時代の様子を描いた『一遍聖絵』という絵巻物を見ると、当時の善光寺に集まる人びとのようすが描かれています。そこには、武士、僧侶、百姓、さらには女性の姿など、さまざまな人びとをみることができます。どんな人でも善光寺仏にすがれば救われ、極楽に往生できるとする信仰が広まっていたことがわかります。

善光寺の門前では、特定の日に市が立ちました。市で品物が取り引きされるところが町屋在家です。ここでは信濃の特産物が商品となりました。もともと市の日に使われるだけなので、建てたりこわしたりできるように素朴な造りとなっています。

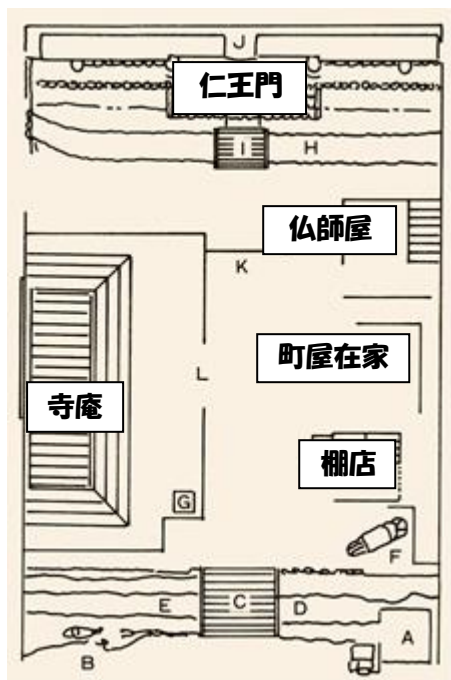
棚店は品物を毎日ならべて売っている商店です。通りに棚を出してそこに商品をならべました。おまいりに来る人たちにとって必要なものもならんでいます。

仏師屋は住居と作業を兼ねた建物です。この時代、妙海という仏像をつくる職人が住んでいたことがわかっています。建物の中を見ると、木の切り株の上に造りかけの仏像があります。脇には道具箱が置かれ、現在とは違った道具を使っていました。

寺庵は僧侶の住まいです。写経（お経を写すこと）などを行っていました。旅の僧や修行者の宿泊施設でもありました。

門前の建物の様子を見て、自分なりの発見をしてみましょう。

◇それぞれの建物を観察して役割を整理し、自分なりの発見をまとめてみよう。



記号	名前	説明 (①～⑤から選ぶ)	気づいたことなど
----	----	--------------	----------

仁王門	(左右二つの像の違い)
説明	

寺庵	(他の建物との違い)
説明	

仙師屋	(道具を見ての発見)
説明	

◇[説明]にあてはまるものを下の①～⑤の中から選ぼう。

- ①お坊さんの住まい
- ②特産物が売られている定期市
- ③仏像を造る作業場
- ④日常品を売っているお店
- ⑤仁王像が待ちかまえている

町屋在家	(売っているもの)
説明	

棚店	(売っているもの)
説明	

★その他の説明

- A：絵巻物をもとにした善光寺の復原模型
- B：亡くなった人をとむらう塔
- D・E：「火」と「水」2つの河
- F：下馬（武士はここでおる）
- G：石を五段に重ねた墓（五輪塔）
- H：鐘鑄川
- J：ご本尊
- K：「来迎図」（阿弥陀さまが亡くなった人をおむかえに来てい
- L：勸請つり（しめ縄でつるして、門内にわざわいが入らないようにするおまもり）

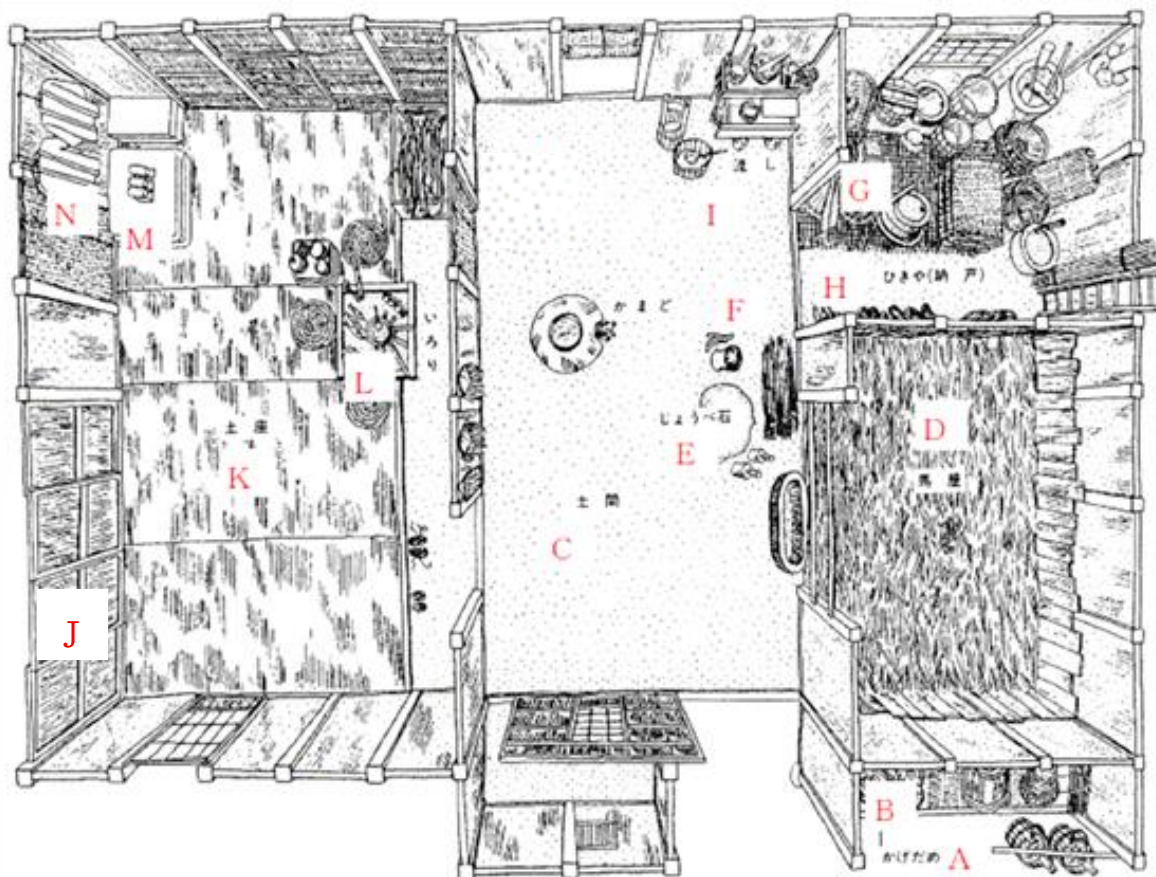
◇このコーナーで感じたこと(雰囲気や気づいたこと)を記録しよう。

近世「江戸時代の農家」

江戸時代の農家のくらし

江戸時代、武士や職人・商人らは城下町に集められ、農民は村で生活しました。

この農家は今から 300 年ほど前の江戸時代に建てられたものです。ここに移築されるまでは上水内郡三水村（現飯綱町）で使われていました。農家は生活と作業の場なので、さまざまな道具があり、今の生活とはかなり違っていました。



A：がげだめ 便所。作物の肥料に下肥（人の糞尿）を利用した。

肥桶 一つには 17 kg の下肥が入っている。かつぐ天秤棒の重さは 1 kg。

B：風呂鉤 木の柄に刃をはめた鉤。 **C：土間** 粘土をまぜた土でかたくつきかためる。 **D：馬屋**

E：じょうべ石（わら打ち石）この上でわらをたたいてやわらかくした。

F：ひでばち 明かりをとるために、この上で松根を燃やした。

G：地機 腰を下ろして布を織る機織り機。後に腰をかけて織る高機が広がった。

H：ひきや 物置小屋。農作業道具を入れておいたり、粉ひきの作業をしたりする。

I：流し ここが台所。足もとには、水をくむ桶や、水を入れておく桶がある。

J：この戸のおくには、座敷と寝間の二間がある。（復原はしていない）

K：土座 居間。「ねこ」とよばれる、わらを編んだ分厚いござが地べたに敷かれている。

板の床の上に臺が敷かれているのは、座敷だけだった。

L：囲炉裏 囲炉裏には鍋の内側にとつての付いた内耳鍋や、おやきがのつた五徳（わたし）がある。

M：すべ布団 布は麻で、中身は「すべ（わら）」。

N：麻衣装 麻糸で織った着物。

◇見つけた道具を上絵に○印をしよう。

◇農家の生活を体験してみよう

①「肥桶」をかつぐ

感想

②「じょうべ石」のところで「わらたたき」を試してみる

感想

③「土座」にあがる（「ねこ」や「囲炉裏」端にすわる。「すべ布団」で寝る。）

感想

◇江戸時代の農家(この農家)と現代の家(自分の家)を比べてみよう。どんな違いがあるかな？

江戸時代の農家（この家）	どこが	現代の家（自分の家）
	明るさ	
	屋根	
	かべ	
	トイレ	
	家の動物	
	そのほか	

農民のくらしの変化

江戸時代前期の農民は、じきゅうじそく自給自足を中心とする生活をしていました。しかし、だんだんと農業技術が進んで収穫が増え、商品作物（売ってお金にする作物）の栽培や、さまざまな「かせぎ」が発達しました。

稲作では、米の新品種を導入したり、せき堰をひいて田を増やしたりしました。畑作では、古くから大麦・小麦・大豆・ゴボウなどがありましたが、新しくナス・ウリ・ネギ・ジャガイモ・キュウリなどの栽培が広がりました。また、木綿（衣料用）や菜種（灯火用、食用）、あい藍（染色用）などの栽培も広がりました。ようさん養蚕や地場産業も発達し、商品は「中馬」とよばれる仕組みなどによって、馬や牛で各地に運ばれました。

麻から木綿へ、一日2食から3食へなど、衣食住が向上し、旅（寺社参りや物見遊山）や村祭りを楽しむことも始まりました。読み・書き・そろばん算盤を教える寺子屋が増えました。

近現代「明治時代の製糸工場」

片倉組（日本を代表する製糸会社）事務所の外観



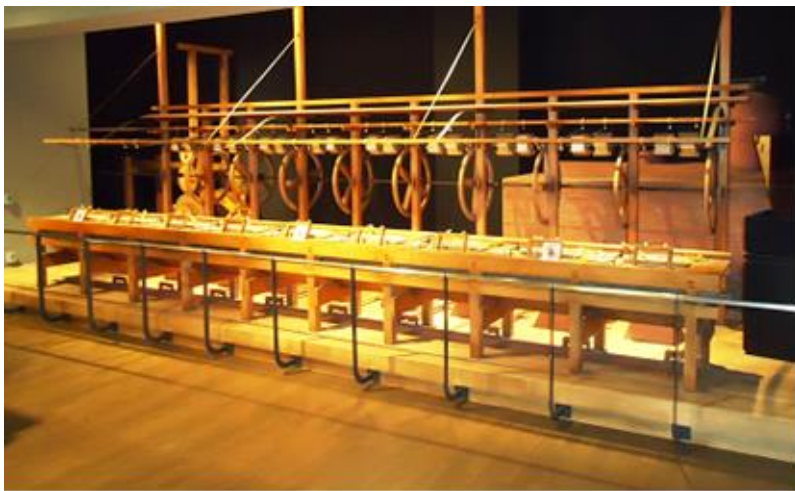
1878年（明治11）、のちの片倉製糸紡績株式会社のもとになる垣外製糸場が、諏訪郡川岸村（現岡谷市）に、片倉兼太郎によってつくられました。

兼太郎は松本などで工場の数を増やし 1895年（明治28）には片倉組というグループに発展させました。

ここでは1910年（明治43）に建てられた片倉組の事務所一階の外観を復原しています。現在は、中央印刷株式会社（岡谷市川岸）の事務所として使われ、国の登録有形文化財になっています。

この建物は煉瓦造に見えますが、実は、コンクリートの外壁にタイルを貼ったものです。これは強度も強く、雨や凍結にも強いものとされていました。

埴科郡西条村六工製糸場

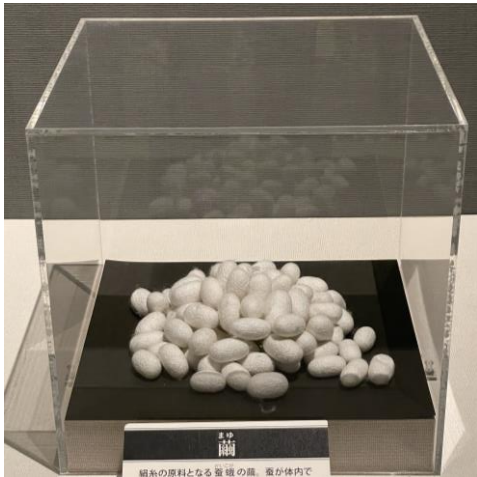


1874年（明治7）、埴科郡西条村（現長野市松代町）にできた六工製糸場の復原です。そのころの日本は、蚕種（卵）や生糸が重要な輸出品でした。明治政府は日本を豊かにするために蚕糸業に力を入れました。

六工製糸場は、1872年（明治5）群馬県富岡町につくられた官営富岡製糸場をモデルにした工場で、一度に50人が座って作業できるフランス式の製糸工場で繭を温める釜などには

地元の松代焼が使われています。考案者は松代藩士の海沼房太郎らです。当時、地元にはボイラーはもちろん、煮繭や繰糸の釜、蒸気をとるパイプなどをつくる技術がなかったので、蒸気器械をつくり出すことにたいへん苦勞しました。

◇明治時代の日本を支えた蚕^{かいこ}の糸や工場^{はたら}で働^{かんさつ}いていた女の人^{かんさつ}の生活について観察しよう。



◇お蚕さまクイズ

1つの繭^{まゆ}からおよそ何メートルの糸がとれるでしょうか？

あなたの答え 約（ ） m

◇糸をとる工場^{はたら}で働^{かんさつ}いていた女の人たちの「食事」や「服装」の様子をメモしよう。

◇今の私たちの教室と比べて、同じところや違うところを探してみよう。

◇同じところは？



◇違うところは？

◇昭和時代に使われていた家電製品^{かでんせいひん}や道具を観察し、今の道具と比べてみよう。



◇見つけたことを書きだしてみよう